

淨智寺の座敷に布袋より太る猫をり背で「さはるな」

といふ 岸並千珠子

下句「……猫をり背で「さはるな」といふ」のユーモ

アが、作者の狙い通りに、ぴたつと決まった。淨智寺に

は安藤寛さんの歌碑がある。安藤さんがご健在だった

頃、淨智寺の沙羅双樹（ハクウンボク）の花盛りの時期

に、淨智寺で湘南歌会があつて参席した思い出がある。

当時、猫がいたかどうかは、残念ながら思い出せない。

滑空翼（カヤノビ）を丘に広げて離陸のとき待ちおりわれは風を

視る人

谷岡亞紀

ハン格ライダーの風待ちをしている場面。ハン格ライ

ダーで飛んでいる作者、これまでもハン格ライダーの歌

をかなり作ってきた。「風を視る人」がポイント。本当

に風が見える感じなのだろうが、その日常から突出した

特別な感覚を、用語・表現にも出して欲しかった。

少し寝て少し読みまた少し眠らん弁当二つ作る朝ま

で

堀越貴乃

今、何時ごろなのだろう。寝坊してはいけない。しかし

し起き出すにはまだ早すぎる。そんな中途半端な時間の

中途半端さかげんをうまくたつた。その工夫に注目。

六三四なる日時計の影たどりつつ時の止まれる鳩の
街過ぐ

「東京歌会」の吟行会の折の作らしい。スカイツリー

の影をたどって向島、東向島あたりを歩いている場面だ
ろう。「鳩の街」は昔の赤線地帯で、私は吉行淳之介の

小説でおぼえている。「鳩の街」を全く知らない人には、全く分からぬ一首だろう。

体罰はなされず手なづけられてゆく者の神聖な怒り

を待てり 小川真理子

現在の学校教育現場の空気を慎重にうたつて。体罰がなくなった代わりに、手なづけられてゆく生徒たち。下句は分かりにくいか、そんな生徒たちが、ちゃんと、飼い慣らされずに自分の怒りを持っている、の意味だろうと読んだ。教師と生徒のあいだの微妙な空氣。

秋の日に牛の大きな目を見ればおのづから湧く豊かなこころ

松本秀一

そう言えば、ここ十年以上牛の目をそばで見たことがないのに気づいた。オランダの一年間は近所に牛がたくさんいたのだが。羨ましい感じの一首。

会ひたいとふ病室からの終の電話すこし怒れる口調なりしか

田中薰

大学時代に出合い、最近まで頻繁に会っていた友人への挽歌一連中の一首。感情をおさえて、客観的に表現しようとしている分深い悲哀が読める。

じめじめと頭の中は湿りゆき秋から冬へ季は流れ

田中拓也

今月の七首、すべて重い暗い空気をうたつて。それはそれでいいのだが、暗い色ばかりで描くのではなく、たとえば「ゴッホの馬鈴薯を食べる人々」のように、暗い色にふと黄色が入っているような、表現上の工夫が

短歌の現在

No.394 今月の15首を読む

佐佐木幸綱